

# 源氏物語の一〇〇年

——「下田講義」から「阿部以後」へ——

横井 孝

## 一 『源氏物語』の「一〇〇年」

「源氏物語千年紀」と言いますが、その由来は『源氏物語』という名前が確かな記録に登場してからちようど一千年ということです。

今からちようど一〇〇〇年前の寛弘五年（一〇〇八）十一月一日、これは旧暦ですので現在の暦では一二月七日にあたりますが、この日、藤原道長の屋敷で五〇日目の誕生祝いが行われました。漢字で「五十日」と書いて「イカ」と訓みます。これは道長の娘彰子が一条天皇の皇子敦成親王<sup>あつひろ</sup>を出産したお祝いです。この宴会を記録した『紫式部日記』で初めて、「源氏物語」の名が登場します。これが『源氏物語』について明記された最初の記録ということになるわけです。

左衛門の督<sup>かみ</sup>（藤原公任）、「あなかしこ。このわたりに、わかむらさきやさぶらふ」とうかがひ給ふ。源氏に似る人も見え給はぬに、かのうへはまいて、いかでものし給はむと、聞きあたり。……おそろしかるべき夜の御酔ひ

なめりと見て、事果つるままに、宰相の君（女房）にいひあはせて、隠れなむとするに、東おもてに殿の君達、宰相の中將（源経房）など入りて、さわがしければ、ふたり御帳のうしろに居かくれたるを……

（岩波文庫、四一～四二頁。ただし黒川本による）

とある一節がそれです。ただ、ここでは「若紫」という名前だけが出てきます。ですから、この段階で「若紫の巻」が出来上がっていたことは間違いありません。それも、当時の公家たちにすでに「若紫」で通じる程度に読まれていたわけですから、当時の文献の伝わり方からして、少なくとも半年ないし一年以上前には完成していたのではないでしょう。

『源氏物語』全体、五十四帖がいつ完結したのかはわかりません。紫式部が亡くなったのは、この時点よりももう少し後のことですが、正確にいつ亡くなったかという記録もありませんので、それを区切りにすることもできません。

したがって、「源氏物語千年紀」といっても、大体一〇〇〇年前ころに『源氏物語』が出来上がったと考えればいいでしょう。稲賀敬二氏が一〇一〇年春に宇治十帖完成、つまり全体の完成ということをおっしゃっていて（『源氏の作者 紫式部』新典社、一九八二年一月刊）、私はこれを支持したいと思っていますので、五十四帖が完結したという意味での「千年紀」はもう少し後ということになります。しかし、学問的な細かいことにこだわらなくても、『源氏物語』が今年でほぼ一〇〇〇歳ということではないでしょうか。

ところで、本日のテーマは「源氏物語一〇〇年」ですから、ゼロが一つ足りないと思われるかもしれません。実はこの「一〇〇年」というのは実践女子大学の歴史とちょうど重なります。また、『源氏物語』の歴史においてはこの一〇〇年がまさに激動の時代にあたるわけで、これを考慮してこのようなタイトルにしました。

また、サブタイトルについては、これからお話しする内容でご理解いただけるものと思います。

## 二 最近の報道から

さすがに千年紀ということで、最近、『源氏物語』の話題が新聞紙上にぎわすことがしばしばありました。とりわけ、この夏以降、『源氏物語』の写本が見つかったという話題がかなり大きな紙面を使って報道されています。

### 大沢本の発見

一つは「大沢本発見」というニュースです。これは、七月二日の全国紙また京都新聞などでも報道されました。各新聞では「大沢本発見」という見出しになっていますが、実際には再発見と言ったほうが正確でしょう。第二次大戦の直前、昭和一〇年代の初めころですが、東京帝国大学に勤務していた池田亀鑑氏がこの大沢本を発見して、調査し始めました。しかし、時間切れで調べきれず、その後行方が知れなかったために詳細を報告できないという旨を著書『源氏物語大成』に記しています。

それから七〇年の歳月を経て、ようやく再発見されたわけです。池田亀鑑氏が亡くなった後、大沢家の手を離れたこともあってか、誰も見る事ができなかったのですが、それが某家に所蔵され、さらにある博物館に寄託されたわけです。それを立川の国文学研究資料館館長の伊井春樹氏が数年かけて調べていたということだったのです。

実はこの前日の七月二日に伊井春樹氏が大阪府立大学で講演をしています。論題は「幻の大沢本源氏物語」。そこにマスコミ各社が詰めかけました。朝日、読売、毎日、産経、日経、さらに地元の京都新聞ほか、テレビクルーも

来ていました。

暑いさなかでしたが、私も聴講だけが目的で東京から出かけました。伊井氏の話術もさることながら、内容自体も興味深く、行つて損はなかったと思えました。

例えば朝日新聞には見出しに「別本」という文字があります。また、さすがにお膝元の京都新聞では一面トップでした。そこには「原本に迫る手がかり」「他にない記述」「重文級」といった記述があります。鎌倉時代後期の写本と見られるということです。

私はまだ実物は見えていませんが、伊井氏だけではなく、何人かの学者も実物を見ているということです。「現在は某家蔵」ということになっていますが、京都・宇治市にある源氏物語ミュージアムに寄託されているものです。ただし、現在（注―二〇〇八年九月末現在）は陽明文庫所蔵の『源氏物語』（重文）が展示されていますが、この本は展示されていません。そこには何か複雑な事情があるようです。

### 飯島本の発見

右に先立つ七月一二日の読売新聞社会面に、別の「源氏物語五十四帖の揃い本が見つかった」という記事が掲載されました。都内の旧家で発見されたということです。折しも新国立美術館で開かれていた毎日書道展で、書道家飯島春敬コレクションが公開されたのですが、そこで展示されました。

室町時代中期のものということで、大沢本よりは新しいもの、ということになります。枡形というよりもやや縦長の、列帖装という綴じ方をしたものです。用紙は雁皮（と報道されましたが、実際は雁皮と楮紙の漉き混ぜです）で上質のものです。あまり書き込みもなく、虫損もさほどはなくて保存状態も良好です。



この「飯島本」についても、全国各紙が報道しています。それについては読売だけではなく、毎日新聞にも「別本」という記述があります。

下って八月二日の朝日新聞の文化欄には、中央大学の池田和臣教授がこの飯島本について、調査をしてきたもので、素性も保存状態も非常によいものと語ったことが報道されています。

### 角屋本の発見

右ばかりではありません。さらに先立つ三月一日、京都新聞にある記事が掲載されました。鎌倉後期の「末摘花」の巻一帖ですが京都島原の旧揚屋「角屋<sup>すみや</sup>」で『源氏物語』の一本が見つかったというのです。島原は現在の京都駅から北西に少し離れたところにある旧花街<sup>かがい</sup>です。揚屋は遊女などを置く店ではなく、外から舞妓や芸妓を呼んで客のもてなしをする場所ということでした。現在は「角屋もてなしの文化館」という名前の施設になっています。そこで、一冊だけではあるけど、鎌倉後期の『源氏物語』の写本が見つかったのです。新聞記事には大々的に「別本」という文字が躍っています。また、同じ日の毎日新聞ですが、「源氏物語写本、第三の系統」と見出しにあります。「別本」は青表紙本系統・河内本系統以外のすべて、の意味ですから「別本系統」というのは、ありえない用語なのですが。

またさらにさかのばれば、二〇〇一（平成一三）年四月に公表された大正大学所蔵の写本があります。一般公開するに際して日本橋高島屋の一面を借りて展示されたものですから、地の利もよかったです、大勢のお客さんで混み合っておりまして、その中で見学した記憶があります。これを伝えた朝日新聞の記事には「青表紙本」という文字があります。

青表紙本・河内本そして別本

——『源氏物語』に関してこの一〇年で、まずはこの二〇〇一年の大正大学本（青表紙本）、それからしばらく間をおいて、今年になって三つも写本が見つかりました（付記 参照）。三月に角屋本（別本）、七月に飯島本（別本）、八月に大沢本（別本）です。

実はこれ以外にも、話題にはなりませんでしたが、この間、紹介されたものがあります。例えば一九九九年ころに、文化庁が「平瀬本」を購入しました。これは専門家の間では話題になりました。

その数年後に千葉県佐倉の国立歴史民俗博物館が高松宮家本というのを購入しました。これは時折展示されています。

さらに二〇〇三年には、立川の国文学研究資料館が、江戸時代の写本ですが「正徹本」（の写し）と呼ばれるものを購入しておりまして、専門家の間では知られていることではあります。

では、それらが一般的には話題にならなかったのはなぜでしょうか。先ほどから紹介してきました専門用語、すなわちキーワードをおさらいしてみましょう。お手許の資料2を御覧下さい。

大正大学本では「青表紙本」というのがありました。ここから「青表紙本系統」とも呼んだりします。これは、あの鎌倉時代の大歌人で学者でもあった藤原定家（一一六二―一二四四）が校訂したものです。元々、青色、紺色の表紙を付けたことからこの名があります。この藤原定家が校訂したものを書写、さらにそれを書写というように広まっていたものを「青表紙本系統」というわけです。

また「河内本」ないし「河内本系統」と呼ばれるものがあります。これは河内守源光行（一一六三―一二四四）という人がいます。一一六三年に生まれていますし、没年も同じ一二四四年ですから定家とほぼ同じ年代ですが、これ

とその子の親行（一一八七―一二七二頃）も河内守になりましたので、この二人を合わせ、さらにその学統を継いだ子孫を含めて河内学派と呼んではしますが、この親子が『源氏物語』を校訂し、こちらもその後、書写で広まったわけです。

「○○系統」と呼ばれるのはこの二つだけです。実はそうではないもう一つが問題のものなのです。いわゆる「別本」と呼ばれる種類の本です。この言葉は池田亀鑑氏が作った言葉ですが、青表紙本系統・河内本系統のどちらにも属さない形で成立したものを「別本」と呼ぶわけです。

今、問題となっているのはこの「別本」です。これまでは、青表紙本、河内本が話題になることが圧倒的に多かったのですが、ごく最近では、「別本」が各新聞紙上などで話題になることが多くなった。

それはなぜなのでしょう。この一〇〇年の間の『源氏物語』研究とはどのようなものになっているのでしょうか。現在、図書館や大きな書店に行けば、『源氏物語』のテキストを読んだり、手に入れたりできます。それらは基本的に「青表紙本系統」のものです。しかし、最近では、すくなくとも専門家の間では「別本」が注目されるようになってきます。この一〇〇年の間に何が起こったのでしょうか。

### 三 『源氏物語大成』以後と阿部秋生『源氏物語の本文』

#### 『源氏物語大成』の理念

『源氏物語大成』という本があります。池田亀鑑氏（一八九六―一九五六）が編集したもので、全体で二八〇〇ページほどあります。一九五三（昭和二八）年から五六（同三一）年にかけて刊行されたものです。それ以来、池田氏

の方針にしたがって源氏物語研究は進められてきたといえます。池田亀鑑氏はその巻一・校異篇の凡例で、

諸本ノ異文ノ校異ヲ表記スルタメニ、ソノ中カラ底本トスベキモノヲ選択スルニ当ツテハ、嚴密ナ考証ヲ重ネタ結果、藤原定家ノ青表紙本ヲ以テ之ニ当テルコトトシ、花散里・柏木・早蕨ノ三帖ハ現存スル定家本ヲ用ヰタ。ソノ他ノ諸帖ニ於テハ、現存諸本中定家本ノ形態ヲ最モ忠実ニ伝ヘテキルト考ヘラレル大島本ヲ用ヰタ。

と書いています。

(五頁)

そして、同じ『源氏物語大成』の終わりに近い巻七（研究・資料篇）の凡例では、

五 第二部ニオイテハ、源氏物語ノ現存諸本ガ、イカナル系統ニ分類サレルカニツイテ、基準タルベキモノヲ吟味シ、ソノ基準ニ照シテ青表紙本・河内本・別本ノ三種ニ大シウルコトヲ論述シタ。

六 青表紙本ノ規定ニ関シテハ、現存スル原本四帖ニ照ラシ、ソノ面目ヲ保有スルト信ズベキ、飛鳥井雅康筆吉見正頼旧藏本（※これは、大島雅太郎氏の旧藏書であるために、現在では京都文化博物館に所蔵されています）が、いまだに「大島本」の名で知られています）ヲ純粹ナモノト確認シタ。

(一頁)

とあります。

池田亀鑑氏はこの藤原定家が校訂した青表紙本、——定家自身はいろいろとアクの強い人ではありますが、恐らくいろいろな本を見比べた結果、一番信頼しうるに足る、というような本をそのまま忠実に書き伝えて、それがそのまま青表紙本として伝わったのではないかと考えました。

定家直筆のものというのが、現在、尊経閣文庫（東京・目黒区駒場）などに四冊だけ残っています。これが青表紙本の原本だろう、残念ながら残りの五十冊は残っていないが、定家の青表紙本の面目をよく伝えていると思われる

るこの大島本、これを信頼すべきものとし、とにかく青表紙本を重視して、源氏物語を読み解いていくべきで、他の河内本、別本というのは、参考程度のものであるとも言っています。

特にこの河内本というのは、校訂され編集された形跡が明白ですので、編集された鎌倉時代の文体に直されたものである、別本にいたっては種々雑多なものが混在し、いろいろなノイズ（誤謬やら後人の勝手な書き直しやら）が混じっているわけで、本当に参考程度でいいのだ、ということ、とにかく、この青表紙本というのを突き詰めていけばいい、と考えたようです。

しかも、この青表紙本というのは、藤原定家が校訂したことになっているが、それ以前の平安時代の文章をよく伝えている、非常に貴重なものだ、というように池田亀鑑氏は考えたのです。

そして、その理念をもとに『源氏物語大成』全八巻三〇〇ページ近くという膨大な本を執筆したために、皆、これに圧倒されてしまったわけです。それ以後、池田亀鑑氏の説に異を唱える人はほとんど現れず、現在では青表紙本、とりわけこの大島本さえ見ればいいのだということになりました。実はこの大島本もそのままではなく、活字にする際にはカギ括弧を付いたり、平かなばかりで書かれているので、漢字をあてはめたり、句読点、濁点を加えたりして読みやすくしてあります。「そういう活字本で見ていけばいいのだ」という風潮が現在では専門家の間でも圧倒的多数となりつつあります。すると、「本当にそれでいいのだろうか」と考える人たちが出てきました。

## テキストの流れ

それはともかく、流れを見るために、青表紙本を底本としたテキストを年を追って紹介してみましよう。

戦前、一九三七（昭和一二）年に『対校源氏物語新釈』が刊行されました。この頃までは「湖月抄」という本が基

本テキストになっていました。この「湖月抄」は江戸時代初期の俳人・学者として知られる北村季吟が校訂・編集した全六十冊のものです。延宝元年（一六七三）に刊行された版本、つまり江戸時代初期に印刷されたものです。

次に戦後まもなく一九四六（昭和二一）年に朝日古典全書が刊行されました。これは池田亀鑑氏が編集したものですから、当然、自説にしたがって大島本を底本としています。

それから一二年後の一九五八年、岩波書店から『古典文学大系』のシリーズが刊行されました。ここでは山岸徳平氏が校訂しています。そのテキストとなったのは、宮内庁書陵部にある三条西家本というものです。

ちなみに、この山岸徳平氏は私どもにとつては身内ともいべき先達です。御承知の方も少なからう——と申しますのは、実践女子大学の学長を永らく務めた人物だからです。また、三条西家は室町時代に実隆（一四五五～一五三七）・公条（一四八七～一五六三）・実枝（一五一～一五七九）という著名な源氏物語研究者の家柄として知られています。その直系の公正氏が実践女子大の教員として勤務された時期もあり、御家流香道の宗家でもありました。

山岸徳平氏は自分の学問観によつて、池田氏の推す大島本ではなく、中世後期以降ひろく読者を獲得した三条西家本に依拠すべきだ、という主張のもとに『古典文学大系』の編集を行ったわけです。ところが、やはり『源氏物語大成』の威力が大きかったのか、その後に続く、『源氏物語』の本はほとんどが大島本をテキストとしたものです。

一九六四（昭和三九）年からは京都大学の玉上琢弥氏が『源氏物語評釈』という全二十巻ほどの注釈書を刊行しています。これは青表紙本の「原本」が残っている四帖はそれに依拠して、残りはすべて大島本を底本としたものですから、基本的に大島本をテキストとしたものといつてよいでしょう。

一九七〇（昭和四五）年からは『日本古典文学全集』（小学館・旧版）が刊行されました。これが非常に広く読ま

れました。このテキストもちろん大島本です。

この後一九七六年から刊行された『新潮日本古典集成』（新潮社）も大島本が底本です。

一九九三（平成五）年に岩波書店から新しい『古典文学大系』が刊行されます。既に山岸氏が亡くなってから時間が経過していたので、新たに五、六人の学者が共同で編集にあたりました。ここでは、大島本など、ではなく大島本だけに依拠するとして新味を出したテキストでした。大島本に欠けている「浮舟」の巻だけは他の底本を使うことにし、残り五十三帖すべてを大島本を底本としています。

そして、一九九四年、『新編日本古典文学全集』（小学館）が刊行されます。これは一九七〇年に刊行されたものの新版ですが、これが現在もっとも読まれているものです。上段に頭注、中段に本文、下段に現代語訳という構成です。一般の人にも読みやすく、上段の注釈には現代語訳を載せる必要がないので、かなり専門的な内容が書けました。そのため、専門の学者ですらこの本をテキストにする人が多くいます。

以上、要するに、戦後は青表紙本Ⅱ大島本を主体に読まれてきたことがわかっていただけでしょう。

## 諸本研究の流れ

次には『源氏物語』の諸本についての研究書を並べてみましょう。

一九五三（昭和二八）年から一九五六（昭和三一）年に池田亀鑑氏の『源氏物語大成』全八巻（中央公論社）が刊行されました。現在では普及版が二十数冊に分冊されて刊行されています。ただこれはまったくの専門書であり、端的に言えば資料集ですので、使いこなすにはかなり手強い本といえます。

これが専門的には根幹となる基本文献としてずっと読まれ続けていたのですが、一九八六（昭和六一）年に本学に

勤務していた阿部秋生氏——つまり本学における私・横井の前々任者にあたりますが——四六判というサイズで二五〇ページという、専門書としてはかなり小さなサイズの本『源氏物語の本文』を刊行しました。この辺りが境目となります。

一九八九年から二〇〇二年にかけてという長い年月をかけて伊井春樹氏をはじめとした複数の専門家が『源氏物語別本集成』を刊行しました。今までまったく注目されなかった「別本」を集めて読者に提供しようという本です。

さらに二〇〇一（平成一三）年には大阪大学に加藤洋介氏が『河内本源氏物語校異集成』というやはりこれまで注目されなかった河内本についての本を刊行されました。

これはどういうことでしょうか。阿部氏の『源氏物語の本文』刊行以来、このような動きが出てきたわけです。阿部氏はその著書でこのように述べています。

『源氏物語』の本文は、青表紙本・河内本共に『源氏物語』の原典そのままの本文とは考えられないこと。つまり校訂者がそれぞれに手を加えているらしいとかがえられるものである……他の作品（注——『源氏物語』以外）の伝本の場合のように、多少崩れてはいても、原典の本文の姿を残しているのではないかと夢を持つことができないということである。

（四四～四五頁）

先ほどの池田亀鑑氏は、定家の青表紙本を見ていけば、それは遠くの向こう側に、素通しのガラスのように、平安時代の『源氏物語』の姿が現れて、そして、平安時代の『源氏物語』の姿の少し向こうに紫式部が書いたオリジナル、つまり『源氏物語』の原典があるのではなからうか、という夢を抱いて『源氏物語大成』を執筆したわけですが、阿部氏はまるでその夢を打ち砕くように「そういう夢を持つことはできない」とにべもなく否定したわけです。



## 「阿部」以後の経過

阿部氏の主張はこういうことです。——青表紙本・河内本・別本、この三種類の分類では、青表紙本がそれ以前の本の忠実な写しであるという、証拠がないということです。「青表紙本」「河内本」という呼び名はこれらが成立した鎌倉時代からありました。池田亀鑑氏は、現在我々が見ることが出来る『源氏物語』の写本を、そういう元々ある名称に当てはめたわけです。これは学問的手続きとしては問題です。なぜかという、青表紙本ならばその概念を突き詰めて、いろいろな証拠を拾い集めて、現代まで降りてきて、現在我々が見る写本と突き比べて、これは「青表紙本系統」と明証するのであればわかる。けれども、「青表紙本」という名称が先にあって、途中の経過を省略して、今我々が見ることが出来るものを、「これが青表紙本だ」と当てはめてしまったのは乱暴なのではないか、と阿部氏は主張したわけです。

これは、こうして説明をすると簡単にわかってしまうことなのですが、今まで盲点だったわけです。なにしろ池田亀鑑氏が二千数百ページからの『源氏物語大成』を、若い研究者たちの力を借りたとはいえ、ほとんど独力で作り上げた、そのエネルギーに皆が圧倒されてしまったわけです。

池田氏がこの本を執筆するためにどれくらいの『源氏物語』の写本を見たかという、三万冊から五万冊だろうと、本人も言っています。いまだかつて、それ以上の写本を見た人はいないだろうと思います。ですから、池田氏のエネルギーに皆圧倒されてしまったわけです。

ところが、阿部氏は、冷静に考えてみると、その論理構造はおかしいのではないかと、と異議申し立てをして検証し直してみただけです。

二〇〇一年ぐらいまでは、太正大学本の時のように、古い写本であれば青表紙本が発見されたということだけでも

ニュースになっていました。その後は、国立歴史民俗博物館や国文学研究資料館が本を入手したといってもあまり話題になっていない。つまり、青表紙本や河内本については、少なくともマスコミはもちろん、専門家の間でも話題にならなくなってきた。

そして今年二〇〇八年には、「源氏物語が発見された。それが別本である」ということが大々的にニュースになるようになりました。それは阿部氏が「青表紙本、河内本いずれも期待できない」と主張したことが起爆剤、導火線となつて、時限爆弾のようになって現在爆発しているのではないか、と私には思えます。

とくに阿部氏が『源氏物語の本文』二五〇ページのうち、半分以上を費やしているのが「『源氏物語』別本の本文」という論文です。非常に長編で、岩波書店が刊行している『文学』という雑誌に四回にわたつて連載されたものが初出です。四〇〇字詰原稿用紙にして二〇〇枚近くあります。学生の卒論一、二本分にあたります。

このように「別本」を前面に押し出した論文を初めて書いたのは阿部氏だと思われます。阿部氏が東大を定年退職して、実践女子大に赴任してから、満を持したようにして発表されたのがこの論文です。

この論文が多くの学者たちに衝撃を与え、『源氏物語』の「別本」を読む人が増え、一九八〇年代の半ばから、一定の咀嚼する時間を経て、現在に至っているのではないかと思います。

#### 四 下田歌子『源氏物語講義』

実はその前にも、各種の『源氏物語』の写本が発見されて話題となつた時期がありました。それは大正から昭和の初めにかけてのことです。江戸時代には、ささほどお話しした『湖月抄』が読まれていました。『湖月抄』Ⅱ『源氏

物語』でした。これはこれで悪くはないのですが、堂上貴族の間に伝えられたような他見を許さぬ写本ではなく、一般庶民でも読むことができる形、版本だったことから、どうしても現代の『源氏物語』の学者は軽視するところがあります。しかし、江戸時代中期から末、そして明治・大正とよほどのことがない限り、普通の人はこの『湖月抄』を読む以外『源氏物語』を読む方法はありませんでした。

各種の写本は公家の邸や寺院、神社などに秘蔵されていたわけです。とくに公家などは京都の冷泉家のように「勅封」つまり天皇が封をするという形式で権威づけされ、当主ですらなかなか見ることができない、という状態になってしまっていました。つまり、『源氏物語』を読みたければ『湖月抄』しかないという状態にあったのは、実践女子大学の創設者である下田歌子も同様でした。

実践女子大学内部の研究史としては、下田歌子の『源氏物語講義』の存在はよく知られていたことでしたが、外部にはほとんど知られていません。私も元は外部から来た人間ですが、外部ではまったくといっていいほど、『源氏物語』に関して下田歌子の名前は出てきません。

私も実践女子大学に赴任してから、内部の人間だからというだけでなく、これはもう少し明らかにしておかなければならない本ではないか、と気が付きました。そこで、ここで紹介しておきます。

下田歌子、元は平尾鋤せきです。安政元年（一八五四）に生まれました。宮中への出仕は一八七二年（明治五）です。そして歌作の上手であったので、皇后から言われて「歌子」と改名したというエピソードがあります。

## 『源氏物語』への憧れ

『源氏物語講義』首巻（実践女学校出版部、一九三四・刊）の「緒言」資料5に、このような意味のことを書

いています。——「いつとはなしに聞き覚えていた『源氏物語』の名称にაცოგれ、早く読んでみたい、早く読んでみたいと熱望していたにもかかわらず、ただの一卷も目に触れたことがなかったのである。父はのたもう、源氏物語は名文ではあろうが、少女には害ありて、益なき書である。大人になって家庭でも作ったのちにせよと、厳禁せられたのである」——なにしろ、歌子が生まれ育った平尾家は、江戸時代以来、代々漢学者として有名な家です。当時の漢学者ですからガチガチです。漢書は山のようにあっても、『源氏物語』のような和書の類はまったくなかった。さすがに和歌に関する歌書はあったようですが、和文いわゆるやわらかい軟文のものはなかったのです。

——「そののち作歌の手引きしていただいた何某の老尼の机上に、たまたま湖月抄の載せてあるのを見て、また懇々とその借覽を願ったが、やはり聞かれなかったけれども、あまりの熱望を気の毒に思われたか、ようやく同書のところどころを抜いて、時々聞かされるのが、どんなにおもしろく、うれしく感じたことであろう」——

下田歌子はこの後、宮仕えをいたします。宮中での仕事は二四時間勤務のようなもので、大変に忙しく、宮中には『源氏物語』の写本などは、それこそ山のように献上されていたり、元々天皇家が所有していて、見ることは簡単でしたが、その機会に恵まれませんでしたし、自分の関心もそこから少し離れてしまっていました。

その後、下田歌子は結婚により宮中から退下します。そして家塾を開いて実践女子学園の前身となる学問所を作り、女子教育の必要性に目覚めると、『源氏物語』は必要不可欠であると感じて、俄然、その研究に熱中し、授業に取り入れていくわけです。

## 河内本の時代

一九三二（昭和七）年に金子元臣の『定本源氏物語新解』という本が刊行されています。金子氏は下田家とは無関

係のようですが、実は一時期、実践女子学園に勤務しています。そして、重要な古写本、古典籍を所有していました。第二次大戦の際に空襲が激しくなると、それらを個人で所有しているのは不安だということで、実践女子学園に寄託しました。ところが、結局空襲に遭い、下田家の貴重な品々とともに燃えてしまいます。下田歌子を持っていたと思われる『源氏物語』に関する多くの書物ももろともに焼失してしまいました。

話が戦災にまで先走ってしまいました。少し戻りましょう。一九三四年には『源氏物語講義 首巻』が刊行されていきました。これはいわば『源氏物語』の解題編、研究編ともいべきものです。大きさは四六判というコンパクトなものです。三〇〇ページを超える分厚いものです。紙も上質で、持ち重りのする本です。

同じ年に『尾州家河内本源氏物語』が刊行されます。これは尾張徳川家が所蔵していた河内本源氏物語の写真版です。これに解説を付けたのが山岸徳平氏でした。

そして、一九三六（昭和一一）年、首巻について『源氏物語講義 第一巻』が刊行されます。これは第一帖「桐壺」の巻から三帖「空蟬」の巻までの注釈書です。非常に詳細な内容です。

自分の宮中生活と『源氏物語』の記述を対比して書かれています（資料6をご参照下さい）。このように宮中体験を書いた注釈書は他にありませんから、もし完結していたら大変に貴重な本になったのではないかと惜しめます。また、第四帖の「夕顔」の巻に相当する原稿は残されていません。これも戦災で失われたのではないのでしょうか。

『第一巻』の刊行後、おそらく「若紫」の注釈以降を書いている途中だと思いますが、同年に亡くなってしまい、草稿だけが残されます。数年前に実践女子学園の図書館の方々が一致協力して草稿を整理し、この「若紫」の巻を単行本として刊行いたしました（『源氏物語講義 若紫』実践女子学園、二〇〇二年三月刊）。

また、一九四二年に池田亀鑑氏が『校異源氏物語』を刊行します。本の形になった『源氏物語大成』の前身です。

『源氏物語』の諸本がどのように発見されてきたかを、年表風にまとめてみましょう。

『源氏物語』諸本の「発見」略年譜

江戸時代 「湖月抄」などが標準本文

⇐

一九二一（大正一〇）年 「平瀬本（河内本）」

一九二五（大正一四）年 金子元臣『定本源氏物語新解』（金子、河内本を入手）

一九三四（昭和九）年 『尾州家河内本源氏物語』

一九三〇～一九三一（昭和五～六）年 池田亀鑑「大島本」発見

一九三六（昭和一一）年 下田歌子『源氏物語講義 第1巻』

山岸徳平『河内本源氏物語研究序説』（「尾州家本」の研究）

一九三七～一九四〇（昭和一二～一五）年 吉沢義則『対校源氏物語新釈』（湖月抄と河内本を対校）

一九四二（昭和一七）年 池田亀鑑『校異源氏物語』（大島本使用）

一九四四（昭和一九）年 山脇毅『源氏物語の文献学的研究』（「平瀬本」の研究）

一九五三～一九五六（昭和二八～三一）年 池田亀鑑『源氏物語大成』（大島本使用）

⇐

現代の状況へ

まずは江戸時代には湖月抄が標準の本文として読まれました。そして一九二一（大正一一）年に平瀬本という河内本が発見されます。

湖月抄というのは青表紙本の流れをくむ、青表紙本系統といっていいものです。この湖月抄に飽きたらない、不審な点がある、おかしいのではないか、という疑問がありながら、他に参照するものがないことを不満に思う人たちがいました。そこにしばらく発見されなかった河内本が発見されたわけです。

河内本は青表紙本と同様に鎌倉時代に作られました。鎌倉後期になると地下にもぐってしまいます。室町時代になると「河内本というのがあるそうだ」ということがわかるだけで、その内容はわからなくなっていました。それが江戸時代を経て明治時代になると、湖月抄に不満を持つ人々の間に「河内本というのがあった」という。それを読めば『源氏物語』の原本に近づけるのではないか」という期待が非常に高まります。

そういう期待の最中に平瀬本が発見されたわけです。皆、この河内本に飛びつきました。すると今度は金子元臣氏が『定本源氏物語新解』というテキスト版を刊行しました。上に簡単な頭注が付いて、下が本文という簡便な三冊組のテキストです。その解説に金子氏は「実は自分は河内本を入手した」として二、三枚の写真を紹介しました。これには皆驚きました。河内本がそんなにあったのか、ということ。平瀬本、金子本ということで、河内本が注目されます。

そして一九三四年に『尾州家河内本源氏物語』が多くの人の目に触れるような単行本の写真版で公開されたわけです。皆、スワットこの河内本に飛びついたわけです。

なにしろ時間がゆったり流れている時代ですから、前後一〇年以上の開きがありますが、今年一年間で三冊が見つかったのと同様の熱狂ぶりだったのではないかと思われれます。それと前後して、一九三〇～三一年に池田亀鑑氏は大

島本（青表紙本）を発見していたようです。

その河内本への熱望・熱狂のさなかに下田歌子の『源氏物語講義 第一巻』が書かれているわけです。ここでは、河内本について盛んに言及されています。本文に何らかの注記をつける際に、かなり頻繁に底本と比較しています。下田歌子が非常に時代に敏感だったことがわかる事例ではないでしょうか。

そしてその同じ年に山岸徳平氏の『河内本源氏物語研究序説』が刊行されます。これは尾州家本の解説書です。さきに刊行された尾州家本の影印の解題を、岩波書店であらためて独立した著書として刊行したわけです。

その後一九三七年から四二年にかけて、京都大学の吉沢義則氏が『対校源氏物語新釈』を刊行します。これは湖月抄と河内本を同時に読めるように、一行ずつ並べたものです。それほどこの時期は河内本が注目されていたわけです。

### 『源氏物語大成』による転換点

ところが、一九四二年、すでに太平洋戦争が始まっていた時期ですが、池田亀鑑氏が『校異源氏物語』を刊行して大島本を底本としました。河内本は二の次とされたわけです。しかし、戦争中ということもあり、本あるいは情報としての流通はかんばしいものではありませんでした。

さらに戦争末期の昭和一九年に山脇毅というほとんど在野といっている研究者が『源氏物語の文献学的研究』を刊行します。これは京都大学の『国語国文』という雑誌に連載されたものですが、これに「平瀬本の研究」がありました。これが、その当時よく読まれた文献です。

その後、一九五三年から一九五六年に池田亀鑑氏の『源氏物語大成』（八巻）が刊行されますがこれは、一九四二年の『校異源氏物語』（四巻）を増補したもので、この大事業に皆驚倒しました。



そして、現在の状況に至っているわけです。

このように一時期、河内本が非常に渴望され、「河内本があればなんとかなる」という熱狂的なものがあり、皆一斉に河内本に飛びついたわけです。この時には新聞沙汰にもなりました。学者たちも皆河内本を読んできました。

ところが、蓋をあけてみると、どうも河内本はおかしい、紫式部の生きていた平安時代中期の表現としてはどうもおかしい、鎌倉時代の表現ではないか、という部分が出てきて、「どうも手触りが違う」と言われ始めたところで、大島本が見つかり、青表紙本にまた戻ってきたわけです。ところが、最近、また青表紙本の地位がゆらぎ始めました。現在は非常にホットなところですよ。

今年（二〇〇八）の二月に伊藤鉄也氏が発表された「〔河内本群〕を指向した下田歌子の校訂本文」（『講座源氏物語研究・第七巻』おうふう）の中で、『源氏物語講義 第一巻』に示された本文の部分を分析して、次のように指摘しています。

……下田は文意を読み取ることを尊重し、わかる本文をめざしたのである。研究者として本文に対峙したのではない。『源氏物語』の読者の立場からよりわかりやすい本文を求めて諸本に目を配り、その結果としての校訂本文を作成したのである。河内本に目が向いていた時代だったという背景も大いに関係している。

たしかに、このように熱狂的に河内本がもてはやされた時期、大正時代から昭和初期にかけて、下田歌子は学者として遇されていたわけではありません。現在もそうです。研究史上それは明らかです。ただ、専門家とは違う場に立ちながらも、下田歌子が時代に敏感に反応していた、ということをや伊藤氏も証明しているわけです。このことは銘記しておいてよいことではないでしょうか。そして、これまでの専門家筋だけの閉鎖された『源氏物語』の研究史に、

反省の材料を提供しているのではないでしょうか。

## 五 結びとして

こうして、「源氏物語千年紀」を迎えました。この一〇〇〇年の間に『源氏物語』はいろんな浮き沈みがありました。書かれた当時は、藤原道長、彰子の親子の間、とりわけ式部が出入りしていた宮廷のサロンでは『源氏物語』はよく読まれていました。その後は藤原定家という和歌の道の大先達が源氏物語を取り扱います。定家の父である俊成が「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事也」（建久四年（一一九三）『六百番歌合』の判詞）といっています。現代風に言えば「源氏物語を読まない歌詠みなんて、ありえないよ」ということです。それ以後、歌詠みたちは『源氏物語』を読まざるをえなくなります。

ところが、下田歌子の父の言い分のように、『源氏物語』というのは、天皇のお后を犯した若者を描いた、非常に不埒な作品である、男と女がくっついたり離れたりと下賤なものではよろしくない、という評価が主体の時代もありました。そういう時代には、例えば南総里見八犬伝のような血湧き肉躍る、勧善懲悪、強きを助け弱きをくじく（笑）——これは冗談ではなく、そういうマッチョな思考法の下にもてはやされました。

そういう『源氏物語』が経てきた歴史をぎゅっと煮詰めたのが、この一〇〇年だったのではないか。青表紙本が読まれ、河内本が読まれ、そしてまた青表紙本が読まれる。そして、今、別本が注目されつつある。別本というのは、非常に複雑で種々雑多なもの、何やら得体のしれないものもあれば、どうやら古そうなものも部分的にはある。汲めども尽きぬ泉とまでいえるかどうかはわかりませんが、まだ見極められていない。ですから、そこには何か地下水脈

か鉉脈があるかもしれません。

けれどもこの百年を見ていくと青表紙本から河内本、また青表紙本とふらふらしているように見えますが、結局、『源氏物語』は紫式部のところまでたどり着けるかどうか、どうもたどり着けないのではないかと、紫式部の二百年後ぐらいのところなら、何とかなるかもしれない、という頼りない手応えを感じつつある、というのが現状ではないか、といえます。あまり大げさな期待をしないで、じっくり進展を待つしかない。学問というのは辛気くさいもので、あまりセンセーショナルなものに囚われずに地道に続けてゆかねばならないのではないかと。学者は『源氏物語』の研究に埋没していかねばならないのではないかと、考えています。

この一〇〇年は『源氏物語』が経てきた歴史を凝縮したで、非常にホットな時代だったといえます。そこに実践女子学園の一〇〇年——もうすぐ一一〇周年になりますが——それが重なってくる時期に居合わせるといえるのは、私にとっては偶然ではありますが、非常に幸せなことなのではないか、と思っています。

#### 〔付記〕

本稿は二〇〇八年九月二七日に行った講演（於東京ウィメンズプラザ）のテープ起こしであり、内容はその時点までに生起したことに限定してある。「別本」を含む勝安芳旧蔵本が武庫川女子大で「再発見」されたと新聞各紙に報道されたのは同年一〇月三〇日のことである。

関連稿として「源氏物語の本文と表現——『大成』以後」と「阿部以後」の模索へ向けて——（横井孝・久下裕利）編『源氏物語の新研究——本文と表現を考える』新典社、二〇〇八年一月刊、所収）、『源氏物語 千年のかがやき』展の片隅に」（『国文研ニュース』一四号）を書いた。旁々参看を乞う。

配付資料

源氏物語千年紀記念 実践女子大学公開講演会

(二〇〇八年九月二七日)

# 源氏物語の一〇〇年

横井 孝

## A 「一〇〇年」の意味

### 資料1 最近の『源氏物語』写本発見(再発見)の状況

- ① 「大沢本」……………別本
  - ② 「飯島本」……………別本
  - ③ 「角屋本」……………別本
- なぜ「別本」なのか?

### 資料2 『源氏物語』諸本研究のキーワード

#### A 青表紙本(青表紙本系統)

藤原定家(一一六二～一二四一)が校訂した。

#### B 河内本(河内本系統)

河内守 源光行(一一六三～一二四四)・親行(一一八七～一二七二頃)が校訂した。

#### C 別本

「青表紙本系統」「河内本系統」以外の（種々雑多な）本、あるいはその総称。「系統」が立たないことに注意。

## B 池田亀鑑『源氏物語大成』以前と以後

資料3 横井孝「『未央柳』のゆくえ——下田歌子『源氏物語講義』の周囲をめぐる考察——」（『源氏物語の始発—

桐壺巻論集』（竹林舎、二〇〇六年二月刊）

①……大正末年から昭和初年にかけては、『源氏物語』研究の新しい時代の到来を予感させるテキストの発掘が相次ぎ、一種異様な熱気の籠もった時期であった。一般に湖月抄や首書源氏物語で読まざるをえなかった近世以来、待望久しい河内本の一本・平瀬本が発掘され紹介されたのが大正一〇年（一九二一）。金子元臣『定本源氏物語新解』上巻（明治書院）「序」に「河内本源氏を入手した」と報じられたのが大正一四年（一九二五）。池田亀鑑が芳賀矢一博士記念会から委嘱された事業として『源氏物語』の諸注集成を企図し、やがて相次ぐ河内本発見を奇貨として、河内本を底本にした『校本源氏物語』に方向転換したのは大正一五年のことだった。

②そして後の『源氏物語大成』の主底本となり、現在のほとんどの活字本の底本となる大島本と池田亀鑑が出会ったのが「昭和五・六年の間であつた」という。……しかも新たな校本の作成は急速に進み、『源氏物語大成』の前身『校異源氏物語』全五巻の刊行が昭和一七年（一九四二）一〇月であった。戦後、索引篇・研究資料篇・図録篇が大増補されて『大成』が成った後の、その影響力についてはもはやいうまでもなからう。その間、昭和九年（一九三四）山岸徳平によって尾張徳川家の河内本が影印として刊行されている。

③こうした昭和初年の本文研究の状況のなかで、実践女子大学の創始者である下田歌子が独自に『源氏物語』の

注釈をこころざし、孜々と『源氏物語講義』を著しつつあったことは注目されたことがなく、いずれの研究史でもほとんど触れられることすらなかった。しかし、尾州家河内本の影印が徳川黎明会から刊行された昭和九年の四月には、「総論及梗概」を収める『源氏物語講義 首巻』（実践女学校出版部）が総三七四頁で刊行され、次いで昭和十一年（一九三六）一〇月には桐壺から空蟬の巻までの全文の注釈を収める『同 第一巻』（同）が総四八六頁で上梓された。著者は昭和十二年（一九三七）一〇月に逝去したために続刊は中絶したが、若紫の巻の草稿が存し、さきごろ『源氏物語講義 若紫』（実践女子学園、二〇〇二・三刊）として刊行されたばかりである。しかも紅葉賀の巻を含めた数帖の講義の速記録も遺されており、これらによって『源氏物語』の全注を企図していたことは明らかであろう。

**資料4 阿部秋生『源氏物語の本文』（岩波書店、一九八六年六月刊）**

①本文は、青表紙本・河内本共に『源氏物語』の原典そのままの本文とは考えられないこと、つまり校訂者がそれぞれに手を加えているらしい……他の作品の伝本の場合のように、多少崩れてはいても、原典の本文の姿を残しているのではないかという夢を持つことができないということである。（四四～五頁）

②『源氏物語』の巨大な伝本群を前にして、これを文献学的に処理しようとする時には、まず本文そのものの形状・性格の分類からはじめるべきで、この青表紙本とはという類の課題を正面に立てることは避けるべきであった。……その本文そのものを扱うことを後まわしにして、伝本の形態的特徴に頼ったことは、手順を二重に誤るもの……（九八頁）

## C 下田歌子『源氏物語講義』の存在意義

### 資料5 下田歌子『源氏物語講義』首巻（実践女学校出版部、一九三四年四月刊）「緒言」

明治維新の曙光もまだ仄めき初めぬ頃、東濃の山里に生れた自分は、旦暮皚々たる御嶽の積雪を望み、模糊たる恵那山の雲霧を眺めて、単調な生活をして居たのであるが、幼年時代から深く和歌に興味を有つて居た為に、勢ひ古文学に引きつけられて、「女の癖に」と叱られつゝも家の蔵書は何くれとなく、手当り次第に読過したけれども、何分自分の家は三代続きの漢学者であつたので、漢籍は可なり蔵されてあつたが、国書は余り沢山も無かつた。其故何時とは無しに聞き覚えて居た源氏物語の名称に憧憬れ、早く読んで見たいくと熱望して居たにも関わらず、たゞの一卷も眼に触れた事が無かつたのである。其の間に同藩士の某が湖月抄を所持して居ると伝聞し、是非拝借して戴きたいと父に懇願した所が、父は曰ふ、「源氏物語は名文ではあらうが、少女には害ありて益無き書である。大人になつて家庭でも作つた後にせよ」と嚴禁せられたのである。

其の後作歌の手引きして戴いた某老尼の机上に、偶ま湖月抄の載せてあるのを見て、又滾々とその借覽を願つたが、やはり聞かれなかつたけれども、余りの熱望を氣の毒に思はれたか、漸く同書のところを抜いて、時々聴かされるのが、どんなに面白く嬉しく感じた事であらう。凡てが貧弱な蕞爾たる山間の小天地に於いて、絢爛な平安朝の盛時、宮廷貴族の豪華な状を脳裡に画いて、眼底に浮ぶ蜃気楼に、如何程胸を躍らせた事であつたらう。

（二二頁）

### 資料6 下田歌子『源氏物語講義・第一巻』（実践女学校出版部、一九三六年五月刊）【評説】

○大殿籠。明治時代、単に「みこし」と申上げた。現今も恐くはさうであらう。「聖上はみこしになつた」の如し。それは、「御格子を閉し奉る」の意味でもあらうか。而も約言してかく申した。

そして、陛下が御寢所へ入御なると、内豎ないじゆやうの人が、「みかうし」とふれる事になつて居たのである。

(二二頁)

○……これも、自分が宮中奉仕の頃の事であるが、恐れながら明治天皇様は、常に整然と御定まりになつて居る御居間、又は御格子の室（御寢所）等に成らせられ、定つた御廊下を通御になる外ほか、いくらも離れて居ない申之口へも、御差さし窺のぞきも遊ばされなかつた位である。それが、御炎上後の旧赤坂御所で、極めて御狭い処であらせられたにも関わらず、左様であらせられた。それゆゑ、丁度源氏物語を繙ひもといたりして居た時、たしか税所さいしよ敦子刀自あつことじだつたか、「今の御事を考へると帝が度々成らせられたなどと云ふ事はあつただらうか」と申されると、老年の某女官が、「どうも昔はさう云ふ事があつたらしい。御下（即ち命婦みようぶ）の所へさへ、昔は聖上が成らせられた事があるらしい」と云はれた。それ故、自分はある程と思つて、「さう云ふ風であつたから、今の所謂御下どころの伊勢が、宇多天皇の皇子を御誕生申上げた事もあつた筈です」などと、敦子刀自と談かたり合つた事を追懷して、参考の為に、茲こゝに加へて置く。

(二八―二九頁)

○めだう。自分が宮中奉仕中（明治の御宇）、自分等の住む局つぼね（紅葉山）の前の縁を、すべて「おめんだう」と称して居た。命婦なみづめ某の談に「伯母なる人は、孝明天皇の御時代以上、三朝に仕へたのであるが、其の老伯母の言に、『昔は白馬の節会せちえと云ふがあり。其の白馬に何等か関した事であつたとかいふ事で、今もところぐの御縁に、馬道の名が残つて居る』といふ事を耳にした」と云はれた。委くわしきを知るよしの無かつたのは、遺憾である。（三〇頁）